Osaka University Knowledge Archive

Title	「パンの夢」の話
Author(s)	三原, 幸久
Citation	Estudios Hispánicos. 1980, 6, p. 55-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97889
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「パンの夢」の話

三　原　幸　久

1106年の聖ペテロと聖パウロの祝日に，Huescaの町で洗礼を受けてキリスト教に改宗した元ユダヤ教のラビ，Moisés Sefardíは，その祝日にちなんで聖ペテロの名前をつけ，またこのユダヤ教の高位聖職者のキリスト教改宗の政治的価値を評価して名付け親の任を引き受けたアラゴン王アルフォンソ一世の名前をもらってPedro Alfonsoと名乗った。

このペドロ・アルフォンソは改宗者の常として熱烈な信者となり，"Dialogi contra Judeos（ユダヤ人に対する対話）"等の護教論を発表した。しかし，ペドロ・アルフォンソの作品で最も有名なものはオリエント系の説話を集め，教訓と共にそれをラテン語で書き著した"Disciplina Clericalis（僧侶の教え）"である。この説話集は後のヨーロッパの諸説話集（デカメロン，カンタベリー物語，Jacques de Vitry 説話集，シュタインハウエル版イソップ物語等）に直接間接の強い影響を与えた，西欧最古の中世説話集の一つであることが認められている。

筆者は今，この説話集の第19話，すなわち，Exeruplum de duobus burgensibus et rustico（２人の都会人と田舎者の寓話）をとりあげ，それが，口承文芸の世界および中世・近世の説話の世界でどのように変化しつつ広められて行ったかを簡単にみてみたい。先ず，Disciplina 中のこの話の全訳は次の通りである。[1]

昔、２人の都会の男と１人の田舎者が仲間になっていっしょにメッカへの巡礼の旅に出，共同で食事をしていた。ついにメッカの近くに着いたが，その時，持って行った食糧品がなくなり，パンを１個作れる僅かな小麦粉を除いては何も残っていなかった。都会の男はこれを見てお互いに話し合った。「わしらは小さなパンしかないのに，このわしらの仲間は大食漢ときている。あの男に何も食べさせないような方法を考えて，わしらだけでパンを食べよう」そこでこんな方法を考えた。それはパンを作って焼き，

焼き上がるまでに眠り，夢をみて，それがどんな夢でも，いちばんすばらしい夢を見た者だけがパンを食べるというのである。2人はこれをうまくやった。単純なその田舎者をこの単純なやり方でだませると考えたからである。そして，パンを作って焼き，その間に眠った。しかし，田舎者は仲間達の嘘をわかっていたので，仲間達が眠ってしまうと，半焼けのパンを取り出し，それを食べてしまい，再び眠った。都会の男の1人が，夢見心地で，びっくりしたようなふりをして目をさますと，仲間を呼んだ。仲間は「どうしたんだ」と尋ねた。「すばらしい夢を見た。2人の天使が天国の門を開き，わしを神様の前へつれて行ってくれた」と言った。すると仲間が言った。「そりゃすばらしい夢だ。わしの方は2人の天使がわしてつれて沈み，大地を開いてわしを地獄へ連れて行ってくれた」田舎者はこれらのことをすべて聞いていたが眠ったふりをしていた。しかし，都会人達はだまそうと思って実はだまされていたのである。都会人は田舎者に声をかけて起こした。田舎者は賢くもびっくりしたようなふりをして答えた。「わしを呼ぶのは誰だ」「お前の仲間じゃないか」と2人は答えた。「もうもどって来たのか」と田舎者は言った。「もどって来たとは，いったいわしらはどこへ行っていたんだい」と2人は尋ねた。田舎者は言った。「今，2人の天使があなた方のうちの1人をつれて，天国のとびらを開き，神様の前につれて行き，別の2人の天使がもう1人の方をつれて大地を開いて地獄へつれて行ったように見えたのだ。こんなことがあったので，わしはあんた方はどちらももうもどっては来ないだろうと思って，起きてパンを食べてしまった」このように仲間をうまくだまそうとする者はかえってだまされるのである。

この話を説話・昔話研究の上から位置づけるならば，Aarne-Thompson の "The Types of the Folktale"[2] ではNo. 1626 "Dream Bread, the most wonderful dream" として，Jokes and Anecdotes （日本民俗学の分類でいう「笑話」）の中のStories about a Man(Boy) のThe Clever Man の中に含まれている。そこには，「3人の巡礼者がいちばんよい夢を見た者が最後のパンを食べることに同意する。1人がそれを食べ，他の人達が死んだ夢を見たので，もうパンは必要ないと思ったと言う」と説明され，文学的典拠として，ナスレッデイン・ホジァやGesta Ramanorum, Scala Celi 等幾つかの類話の他に，昔話として， 100余の類話をあげて

いる。（その内訳を見ると，昔話採集の進んだアイルランドの42話は例外としても，ギリシア10話，プェルトリコ10話，リスアニア８話，チェッコ６話が主な所で，北欧にほとんどないのが注目される）またStith Thompsonの"Motif-Index of Folk-Literature"[3]にはK444 "Dream Bread, the most wonderful dream" として登載され，Aarne-Thompsonの「昔話の型」とほゞ同じ解説と，幾つかの類話の文献が記されている。また中世の説話の話型を独自の分類基準によって配列したFrederic C. Tubachの "Index Exemplorum"[4]では，No. 1789 "Dream Bread" として,「昔話の型」の最初の解説の文章が記され，30話ほどの中世の類話の出典が記録されている。John Esten Kellsrの "Motif-Index of Medieval Spanish Exempla"[5] ではThompsonと同じくK444の項にこのDisciplina Clericalisの例とLibro de los Enxemplosの例が出典として記されている。

今，話をイスパニア文化圏のみに限るとすれば，古典説話の分野ではこの話はDisciplina Clericalisの他には次の３書にしか現われていない。

(a) Libro de los Enxemplos, [6] No. 27 "El que a otro quiere engannar, El engaño en él se puede tornar（他人をだまそうとする者，そのいつわりは自分に返る）" これはDisciplina Clericalisのほゞ完全なイスパニア語訳である。[7]

(b) Fábulas de Esopo, Collectas（番外寓話）の部，No. 5 "Engaño de los tres Compañeros（３人の仲間の嘘）" ２人の都会人と１人の田舎者。同じくメッカ巡礼の途次に食糧がなくなる。その他，ほとんどDisciplina Clericalis に同じ。Disciplina に比べて10%ほど文章が長くなっている。

(c) Espéculo de los Legos, [8]85章No. 532 Per Alfonsoの話として記す。内容はほとんどDisciplina Clericalisに同じ，ただし長さは約半分以下に短かく，要約だけの語りになっている。

以上で見るように，古典説話の３類話共にDisciplinaの翻訳ないしは要約にすぎない。さて，次に口承文学の世界になると，ぐっと華やかになって来る。この話を類話に持つ国は現在の所，イスパニア１話，イスパノアメリカ18話，ブラジル３話を数えることができる。今，順にその要素の異同を記そう。

(1) イスパニア・アンダルシア "Juaniyo er tonto（愚か者フアン）"

El Folklore Andaluz, Sevilla, 1883 pp. 133～134主人公は三人の兄弟。
—資料未見—

(2) 米国ルイジアナ州（イスパニア語地帯）Raymond R. MacCurdy: Spanish Folklore from St. Bernard Parish, Louisiana. Part Ⅲ. Folktales, Southern Folklore Quarterly XVⅠ(1952) p. 237 "Los tres Bandidos（3人の山賊)" 3人の山賊があちこち放浪していたが，卵3コとパン2枚しか食糧を持っていなかった。そこで最も嘘のようなすごい夢を見た者が食べることにしようと決めた。いちばん若い山賊は起きていて食べてしまった。他の1人は天国に行った夢を，もう1人は天国よりも遠くへ行った夢を見たと言う。若い山賊は2人が高い所へ行ってしまったので，もうもどって来ないと思って残った食糧をみな食べたと言う。

(3) 米国コロラド州Juan B. Rael: Cuentos Españoles de Colorado y de Nuevo Méjico, Stanford, 1957, Vol. Ⅰ, pp. 144～145, No. 87 "Los dos Sabios y el Cocinero（2人の賢者と料理人)" 2人の賢者が料理人をつれて野原へ出て子羊を買う。賢者達は最もすばらしい夢を見た者が焼いた子羊の頭を食べることにする。夜の間に料理人は頭を食べてしまう。次の日の朝，賢者達は天使の合唱と共に天国に行った夢を見たと言う。料理人は2人が天国へ行ったのを見たので，起きて子羊の頭を食べてしまったと言う。

(4) 米国プェルトリコ J. Alden Mason: Porto-Rican Folk-lore: Folk-Tales, Journal of American Folklore XLⅡ(1929) pp. 98～99, No1 "Los tres Gallegos（3人のガリシア人)" 3人のガリシア人（イスパニアの昔話では愚か者と代名詞とされる）が島を歩き回るが1ペセタしか持っていない。3日間飲まず食わずで歩いた後，その1ペセタで若鳥を買って焼く。いちばん遠い所へ行った夢を見た者がみんな食べることにしようと1人が提案する。1人はフランスへ，もう1人はドイツへ行った夢を見たと言うと，残った1人は，お前達が遠くへ行ってもどって来ないと思ったので，若鳥は食べてしまったと言う。

(5) 同上 ibídem. p. 99, No. 2 "Los dos Gallegos y el Andaluz（2人のガリシア人と1人のアンダルシア人)" 3人が狩りに出るが鳩1羽もとれない。1軒の家で雌鶏を手に入れ，料理する。お互いにそれを手に入れたのは自分の功績だと口論するが，次の日に残し，美しい夢を見た者が

食べることにする。ガリシア人が眠ったのを見て，アンダルシア人は1人で食べてしまう。次の朝，1人は天国へ，もう1人はツェッペリン号に乗って月世界へ行った夢を見たと言う。アンダルシア人は2人がとても遠くへ行ってもどって来ないと思ったので雌鳥を食べてしまったと言う。

(6) 同上 ibídem pp. 99～100, No. 3 "Los tres Gallegos (3人のガリシア人)" 3人のガリシア人が旅をして腹をすかせ，ある老婆の家へ着いて食べ物を頼むが小さい若鳥1羽しかない。そこでいちばん高い所へ上がった夢を見た者が若鳥を食べることにする。1人のガリシア人は先に起きて若鳥を食べてしまう。後に，1人は天国の入口まで，もう1人はバベルの塔の入口まで上がったと言うと，先のガリシア人は，お前達が遠くまで行ったのを知っていたので，もどって来ないだろうと思って若鳥を食べたと言う。

(7) 同上 ibídem p. 100, No. 4 同じ題名 3人のガリシア人が失業して，9センタボしかお金が残っていない。米と鱈を買ってスープを作り，1度眠って，いちばん遠い所まで行った夢を見た者が食うことにする。1人はローマからロンドンへ，もう1人は金星へ行ったと言うと，もう1人仲間が遠くへ行ったのでもどらないだろうと思って起きて食べてしまったと言う。

(8) 同上 ibídem p. 100 No. 5 "Cuentos Gallegos (ガリシア人の話)" 3人の腹をすかせたガリシア人が隠元豆のスープを手に入れ，いちばん高い所へ行った夢を見た者が食べることにする。1人だけ早く起きて先に食べてしまう。あとで2人は起きて，1人は天国へ，もう1人はもっと高い所へ上がったと言う。先の男はあなた方がそんなに高く上がったので，私が1人で食べたと言うと，けんかになり，お互いに殺し合った。

(9) 同上 ibídem pp. 100～101, No. 6 "Los tres Galleguitos (3人のガリシア人の子供)"善良なガリシア人の家の戸口へクリスマスイブの日に3人のガリシア人の子供が歌を歌いながらやって来て，食べ物をくれと言う。ガリシア人はいちばんおもしろい話をした者にいちばんたくさんやろうと言う。いちばん年上の子供が天国へ行ったと言うと，その次の年の子がもっと上へ行ったと言う。いちばん小さい子供が，「ぼくだけ下界にいたのでお菓子をみんな食べた」と話して，いちばんたくさんお菓子をもらった。

(10) 同上 ibídem p. 101, No. 7 "Los tres Soldados (3人の兵士)"

3人の兵士が宿屋で食べ物を頼むが野兎1匹しかない。そこでいちばん賢い兵士が仲間の2人に，これから眠って，いちばん高い所へ昇った夢を見た者が兎を食べることにしようと言う。その男は眠ったふりをして兎をみんな食べてしまう。やがて仲間は起きて，1人はキューピットの庭園へ，もう1人は星の世界へ昇ったと言う。賢い兵士は，君達がもどって来ないと思ったので兎を食べたと言う。欺す方の人が他の話と逆になっている。

(11) 同上 ibídem pp. 101～102, No. 8 "El Mejor Sueño (最良の夢)" 2人のガリシア人と1人のアンダルシア人が外国へ職を捜しに行く。上陸した時はパンひときれしかなかった。それを食べて，次の日，老婆の家で宿を求めるが，食べる物は1人分しかない。アンダルシア人が明朝までおいておき，最良の夢を見た者が食べようと言う。みんなが寝ると，アンダルシア人は起き上がって食事を食べてしまう。朝に，1人のガリシア人は王の宴会に，もう1人は天国の宴会に出席したと言う。アンダルシア人は2人共満腹しただろうと思ったので，食事は食べてしまったと言う。

(12) 同上 ibídem pp. 102～103, No. 9 同じ題名　3人の学生がバヤモンの町から旅行する。持ち金の2センタボでバナナとパンを買って食べる。こうして何日も腹をへらして歩くが五日目にある家で，豚の子とバナナを出される。少ないので，ひと眠りし，いちばん遠くへ行った夢を見た者が食べることにする。いちばんずるいホセがすぐに起き上がり、豚とバナナを食べてしまう。目をさますと，ホアンが雲の上へ上がって神さまに会った夢を見たと言い，ペドロが海の水のしずくの数をマイル数にしたほど遠くへ行った夢を見たと言う。ホセは，君達が遠くへ行ったのを知っていたので，今夜中に帰れまいと思ってごちそうを食べてしまったと言う。友人達はホセを追いまわす。

(13) 同上 ibídem pp. 103～104, No. 10 "Los tres Amigos (3人の友達)" 3人の友人が旅に出て卵を1つみつける。2人がいちばんばかな仲間にどうしようかと言うと，卵にいちばんいい言葉で呼びかけた者が食べることにしようと言う。1人が卵のからをむいて「お前の冠をぬがせた (Descoronado tú seas)」と言うと，もう1人は「塩をふりかけた (Saliste piensa)」[15] と言い，ばか者が卵を口に入れて，「お前は食べられた (Manduca tú seas)」と言い，食べてしまう。さらに5日間腹をへらして歩き，ある店でパンを1つもらう。ばか者がまた眠って夢をみた者が食べ

ようと提案する。次ぎの朝，１人は結婚式に出席してごちそうを食べた夢を，もう１人は500ペソ拾った夢を見たと言うと，ばか者はあなた方はごちそうを食べたと思ってパンは独りで食べたという。このあと，AT1920E (嘘くらべ) の話に続く。

(14) メキシコ・タマウリパス州 Americo Paredes: Folktales of Mexico, Chicago, 1970, No. 59, pp. 164～165 "The two Psychiatrists. (２人の心理療法家)" 2人の心理療法家がお互いに相手を精神分析することになる。１人は自分の夢だと言って，ケネディに招待され，米国へ行って宴会に出席し，シャトルの世界博へ行ったと言うと，もう１人はアパートにいるとマリリン・モンローが訪ねて来た。２人でハイボールを飲み，やがてモンローは衣服をぬいだ。そこへまたドアがノックされ，出て見るとキム・ノヴァックが訪ねて来た。しかし裸の２人の美女にはさまれてどうすることもできなかった夢だったと言う。先の医師が惜しがって，「どうして私を呼んでくれなかったのだ」と言うと，「呼ぼうとしたよ。でも彼女らが君はシャトルにいると言ったのさ」と答える。在来の昔話の話型を世間話的に改作したもの。

(15) メキシコLolita Huning Pooler: Three Spanish Folktales, New Mexico Folklore Record IV(1949～50) p. 21 イタリア人は天国の美しい姫君と結婚した夢をみたと言い，アメリカ人は自分がすばらしい美男子になった夢を見たと言う。メキシコ人が起きていて鶏を１人で食べてしまい，あなた方が遠くへ行ったので鶏がくさると思って先に食べてしまったと言う。

(16) メキシコ・オアハカ州Paul Radin & Aurelio Espinosa: El Folklore de Oaxaca, New York, sin fecha, No. 119, p. 230 "Cuento de Tres Hermanos (３人兄弟の話)" 3人兄弟が田舎の町で泊まることになるが，パンが１つしかない。長兄が明日いちばん美しい夢を見た者が食べることにしようと言う。下の弟は木に登って眠る。朝に長兄は次兄といっしょに天国へ行った夢を見たと言う。下の弟は「あなた方が２人天国へ行った夢を見たので，私は木に登ってパンを食べたと言う。そこで卵１つしか残っていないので，長兄はラテン語をいちばんよく知っている者が食べることにしようと言い，長兄が "Salorum" と言うと，次兄は "Amen" と言って卵を自分の口にほうりこむ。長兄は結局何も食べられなかっ

た。

(17) アルゼンチン・サンルイス州Susana Chertudi: Cuentos Folklóricos de la Argentina, 1a serie, Buenos Aires, 1960, No. 85, p. 217 (Susana Chertudi: Juan Soldado No. 38, pp. 150) "El Cura y el Paisano (司祭と農夫)"〈『アルゼンチンの昔話』(三弥井書店) pp. 183～184に伊藤太吾氏の訳あり〉司祭と農夫が旅をし，アルマジロを捕えて焼くが，ひとり占めにしようとする司祭は，今晩寝て良い夢をみた方が食べようと農夫に提案した。司祭が寝ると，農夫は起きてアルマジロを1人で食べてしまう。次の朝，司祭が天国へ行った夢を見たと言うと，農夫は，自分も神父さんが天国へ行った夢を見たので，自分が1人で食べてしまったと言う。

(18) チリ・バルパライソ州Yolando Pino Saavedra: Cuentos Folklóricos de Chile, Tomo Ⅲ, No. 209, pp. 125～126 "Los Pipiolillos (つまらない男達)" 2人のつまらない男がサンチャゴから港へ行こうとし，途中で仕事を捜しに行く兵士に会い，いっしょに行く。途中でパンを1コ買い，トルティリアをもらう。また別の所で卵をもらう。坂道で，ラテン語をよく知っている者が卵を食べることにして，言葉遊びをする。晩に，いちばん美しい夢を見た者がトルティリアを食べることにする。2人はすばらしいごちそうを食べた夢を見たと言うと，兵士はそれでは私がトルティリアを食べようと言って食べる。そして，今まで金持ちだと思ってついて歩いたが，無一文だとわかったからと言って，2人と別かれる。

(19) ブラジル・リオ・グランデ・ド・ノルテ州Luís da Câmara Cascudo Trinta Estórias Brasileiras, 1955, Porto, p. 30 "O Preço do sonho (夢の価値)" イエスは聖ペテロと聖ヨハネをつれて地上を歩きまわっている時，山里で貧乏な家に宿を求めるが，チーズひときれしか食物がない。イエスは明朝いちばん良い夢を見た者が食べることにしようと提案する。ペテロは夜起き上がってチーズを食べてしまう。次の朝，イエスは天国の夢をヨハネは地獄の夢を見たと話す。ペテロは夢は見なかったが主が天国へ，ヨハネが地獄を訪れたのを見て，この世の物はもう必要がないだろうと，チーズは皆食べてしまったと答える。

(20) ブラジル・セアラー州Luís da Câmara Cascudo: Contos Tradicionais do Brasil, Rio de Janeiro, Rio de Janeiro, 1967(No. 60),

pp. 329～331 "O Caboclo, o Padre e o Estudante（ガボロクと神父と学生）〈筆者訳『ブラジルの民話』（新世界社）p. 128 に掲載〉学生と神父がカボロク（混血民）をつれて森の中を旅行し，一片の山羊のチーズをもらう。神父がみんなで眠り，いちばんきれいな夢を見た者がチーズをもらうことに決める。夜中にカボクロが目をさましチーズを食べてしまう。朝，神父はヤコブの階段の夢を見たと言い，学生は先に天国にいて神父の上がって来るのを待っていたと話す。カボクロは2人が天国へ上がっている夢を見たので，声をかけると，「チーズはお前が食べておけ」と言ったのでもう食べてしまいましたと言う。

(21) ブラジル Luís da Câmara Cascudo: Jesus Christo no Sertâo, Revista do Brasil No. 79, São Paulo, Julho, 1922 pp. 245～247.

—資料未見— 主人公はイエス・キリストと聖ペテロとユダ。

(22) ブラジル・ミナス・ジェライス州 Antonio Torres(Pros & Contra) の発表した類話 —資料未見— イエズス会員とドミニコ会員とカプチン会員がフライを争い，カプチン会員が結局フライを食べる。

今，イスパニア語圏のこれらの口承の類話を見ると，世間話風になった(14)を除き，ほゞ斉一な形を保っており，登場人物や争う目的物こそ変化があるが話の組み立て（夢による競争，頓智ある1人による意表外な解決）は全く変っていない。登場人物や争う目的の食べ物はこの話にとってあまり重要性のない variable element であると思われる。

登場人物については，最後に勝利を収める主人公が，身分・教養において他に劣っている例が多いが，これは昔話一般の当然の要求を満たしていると言うべきだろう。都会人と田舎者（文献記録），年長者と年少者（第2，9例），賢者と料理人（第3例），ガリシア人とアンダルシア人（第5例，11例，昔話で『愚か村』視されるガリシア人が，田舎者の象徴とされるアンダルシア人より上位におかれている）外国人とメキシコ人（第15例）司祭と農夫（第17例）神父・学生とカボクロ（第20例）等，対立関係のある方が本来の形であり，対立関係のない第4，6，7，8，12，13，16例等はその要素が忘れられたのであろう。また第14，17例では主人公が2人であるが，話の流れから言っても，また3回の繰り返しを強調する昔話—

般の構造から言っても3人の登場が本来の形で，2人登場の類話は派生的変化であろう。

興味深いのは第14例の世間話化したメキシコの例である。元の形からは変質して，chisteの形になった文献では珍しい例であるが，この話に付けられた編者Paredesの解説には，「この話はメキシコで，中でも特に北部メキシコと米国西南部では，誰でも知っている話であるにもかかわらず，印刷された書物に書かれることが少ないのは不思議である。もっとも一種のワイ談として話されるのが普通である」とあるところによれば，かなりよく知られたchisteなのだろう。

また第13，16，18の3例はBoggsのイスパニアの昔話話型索引[16]およびHansen のイスパノアメリカの昔話話型索引[17] には*1942として登載されている「卵争い」の話（Aarne - Thompsonの『昔話の型』には記載がない）が前接または後接している。これはパンではなくて卵を手に入れるため，誰がいちばんラテン語をよくく知っているかを争う話で，「casco cascorum」等，あやしいラテン語の表現が現われる。同じ食べ物を争う話で，頓智ある者が勝利を占めるので，この「パンの夢」と結びついたのであろうが，笑話としての緊張を必らずしも高めていない場合もある。

さて，イスパニア文化圏においてこの「パンの夢」の話型をもつ諸類話は口承と，文献記録のいずれが先であろうか。変化の少ないことその他をみて，一見，口承の全類話はDisciplinaをイスパニア語訳したEsopoまたはLibro de los Enxemplosあたりから出たように思うそうだが，確証はない。ただはっきり言えることは，たとえ口承の昔話がDisciplina Clericalis以前からイスパニアに存在したとしても，Disciplinaを書いたPedro Alfonsoは口承の物語を採用したのではなく，アラビア語によるモーロ人の資料を訳したものであろう。

今，目をオリエントに移すならば，今までに発見されている最古の記録はパリ国立図書館にあるアラビア語の古写本Mozhat el Odabāで，イスラム教徒とキリスト教徒とユダヤ教徒が1つの菓子をめぐって夢を見あう話であると言われる。

この話のオリエント起源説の1つの根拠はオリエントにこの話が広く口承で分布することである。例えば，Heda Jason の Types of Jewish -Oriental Oral Tales[18]では，在リビア，トルコ等のユダヤ人の類話が9

話記録されている。またトルコ族の関係では，筆者の目に入った範囲内だけでも，オスマントルコ族,[19] タタール族,[20] ウズベク族,[21] カラカルパク族[22] から報告され，イラン系統の民族ではクルド族,[23] アフガン族[24] から報告がある。またソ連領のコーカサス諸族からもオセット族,[25] ダゲスタン族,[26] アヴァール族,[27] アドゥイゲ族[28] から採集されている。さらに現代インドからはW. Norman Brown の報告があり,[29] またパンジャブ地方からはHelmtraut Sheikh - Dilthey の報告もある。[30]

最後にこの話のわが国における類話についてみてみよう。わが国にこの話が始めて記録されたのは，いわゆる『国字本　伊曽保物語』[31] の上巻の16話に「いそほと２人の侍夢物語の事」と題される話で，イスパニア語またはラテン語訳のEsopo（いずれもSteinhöwel 編集によるもの）から和訳されたものであろう。（なお，天草本と言われるローマ字版のイソホ物語にはこの話はない）これはDisciplina の重訳ではあるが，うまく日本的に翻案され，侍２人がいそほを誘って涼みに出かけるが，酒の肴が一つしかないのでいちばん良い夢をみた者が食べることにする。２人は起きて１人は天国へ行った夢,もう１人は地獄へ行った夢を語ると,いそほは「あなた方２人がそれぞれ天国と地獄へ行ったのでもどらないと思って肴を１人で食べた」と言う。

この『伊曽保物語』がどの程度，民間伝承に影響を及ぼしたかは全く不明である。しかし，この話が民間で採集されているのは現在までただ１話しかない。それは山形県の置賜地方で採集された「夢と餅」という話である。[32]

昔，３人兄弟がいた。お正月に大きな餅を１つもらい，いちばん良い初夢を見た者が食べることにした。末の弟だけは起きていて餅を食べてしまった。長兄は「一富士，二鷹，三なすび」とそろった良い夢を見たと言い，次兄は大きな餅を腹いっぱい食べた夢を見たと言う。末弟は兄が富士山に登って鷹にさらわれて死に，２ばんめの兄も大餅を食べた夢を見たので，起きて，たった１つの餅を食べた方が良いと神様に言われて餅を１人で食べてしまったと言う。

このようにパンが餅になるなどあまりにも話ができすぎていて，ヨーロッパからの直接の明治以後の伝播と考えられないこともないが，あるいは江戸時代くり返し出版された『伊曽保物語』によるものかも知れない。と

にかく完全に話のふん囲気は日本化されている。(33)

しかし，この日本語の類語の発見によって，オリエント起源と考えられるこの話は，このようにユーラシアの西の端から東の端まで広く広まる結果となった。

註

(1)Pedro Alfonso: Disciplina Clericalis, edición por Angel González Palencia, Madrid - Granada, 1948, No. 19, pp. 50～52

(2)Helsinki, 1961

(3)Bloomington, 1966

(4)Helsinki, 1969

(5)Knoxville, 1949

(6)Biblioteca de Autores Españoles, Tomo LI, pp. 453～454

(7)Madrid, 1929, facsímil, pp. CXVI－CXVII

(8)Madrid, 1951.

(15)Sal(塩) とのかけ言葉か。この部分の訳はいずれも言葉の遊びである。

(16)Ralph Steel Boggs: Index of Spanish Folk - Tales, Helsinki, 1930

(17)Terrence Leslie Hansen: The Types of the Folk - tale in Cuba, Ruerto Rico, the Dominican Republic, and Spanish South America, Berkeley, 1957

(18)雑誌FABULA, VII 1964～65の中に掲載。

(19)A. Wesselski: Der Hodscha Nasreddin, Bd. II, Weimar, 1911, No. 540, p. 243

(20)M. Ярмухаметов: Татарские народные сказки, Казань, 1957, p. 145

(21)M. Шевердин: Узбекские народные сказки, Том II, Ташкент, 1961, No. 117, 114

(22)A. Волков: Каракалпакские народные сказки, Нукус, 1959, p. 81

(23)M. Б. Руденко: Курдские народные сказки, Москва, 1970, No. 16, pp. 43-44

(24)К. А. Лебедев: Афганские сказки и легенды, Москва, 1972, No. II-31, p. 238

(25)Г. А. Дзагуров: Осетинские народные сказки, Москва, 1973, No. 5, pp. 25-26 およびA. X. Бязыров: Осетинские народные сказки, Сталинир, 1960, No. 42

(26)X. Халилов: Сказки народов Дагестана, Москва, 1965, No. 15

(27)Д. М. Атаев: Аварские народные сказки, Москва, 1972, No. 13

(28)Т. Керашев: Адыгейские сказки, Майкоп, 1957, pp. 204-206; 302

(29)W. Norman Brown: The Pantchatantra in Modern Indian Folklore, JAOS XXX IX, No. 11

(30)Helmtraut Sheikh - Dilthey: Märchen aus den Pandschab, Düsseldorf / Köln, 1976, No. 76, (関楠生訳『ぎょうせい 世界の民話 パンジャブ編』No. 72)。

(31)前田金五郎校訂『仮名草子集』岩波書店版 日本古典文学大系 pp. 383－4

(32)武田正『雪女房』置賜民俗学会，昭和42年，pp. 268－70

(33)ただ欧州の「卵争い」に相当する「餅争い」(「言うに言われぬ」「餅連歌」とも言われる)という笑話の話型はわが国にも広く分布する。これは三人の小僧が和歌や俳句を作って頓智で一つの餅を争う話で，最後の最も小さいが賢い小僧が勝利を得る点も「卵争い」と同じである。

(補語) この型話のイスパニア文化圏以外の欧州現代の昔話伝承の状態については次の論文がある。

Paul Franklin Baum: The three Dreams or "Dream-Bread" Story(Journal of American Folk-lore, Vol. 30, 1917, pp. 378-410)